ガザ 戦争から3年
子どもたちと家族のいま

2014年のイスラエル軍侵攻から3年。破壊と犠牲を生き延びた人たちの近況と支援活動を報告します。
現在のガザでは爆撃こそ日常的にないものの、厳しい封鎖は依然として続いています。
それに加えて、PLO主体のパレスチナ自治政府（ヨルダン川西岸）とイスラム主義政党ハマス主体のガザ政府の対立によって、市民生活が大きな被害を受けています。特に爆撃された発電所の修復が進まないことと燃料の不足により、発電量が足りず、毎日3、4時間しか電気がない状況が春以来続いています。
停電によって上下水道やその他のインフラにも大きな影響が出ているほか、医薬品不足が深刻化しています。

ハニーン姉妹

2014年8月、50日の戦争が終わったその日、停戦のアナウンスがあったにもかかわらず、ガザ市北部のビーチ難民キャンプにあったハニーンの家は空爆されました。家は全壊し、朝食のパンを焼いていた母親と2人の妹が亡くなり、家にいたハニーンも大ケガを負いました。爆弾の破片が右腕に刺さり、右肘の筋肉がえぐれ、神経も損傷して手首から先は全く動かなくなりました。背中にも大きく深い傷を負い、顔にも爆撃の破片が無数にささり、頬には火傷痕が残りました。その後、ガザでは治療できないためトルコへ搬送され、右足太ももの一部を右腕に移植する手術を受けた後、右腕には上腕から手首まで肘スプリントを装着してガザに戻ってきました。家の外にいた姉のヤスミーンも爆弾による破片で右腕の肘関節と背中を負傷。いま姉妹は父親と弟2人、祖母や伯母と、カタールの支援で建てられた家で暮らしています。

効果が出たリハビリ

去年の5月から週に3回、理学療法士がハニーンの家を訪問してリハビリに取り組みました。腕を上げたり、左右に動かしたりして可動範囲を広げ、骨と関節が固まるのを防ぎます。また手を握ったり、手首を上下して神経が通ることを目指してきました。お父さんによると、ハニーンは母を亡くしたうえに、手術を経験し、しばらくは全く話をしなくなったそうです。しかし理学療法士が上手にコミュニケーションをとりながらリハビリをしてきました。

1年前にはまだ肘スプリントを装着していた

理学療法士と髪をとかす練習

今年になってからハニーンやヤスミーンは、他の負傷した子どもたちと一緒に、遊園地に遊びに行くことができるようになりました。また小さなボールなどを右手でつかむ、壁に向かって手を上げていく、ブラシを使って髪をとく、自分で洋服を着るなど練習を繰り返した結果、今では右手でも鉛筆を30分間握れるようになって、学校の成績も向上しました。また食器を洗ったり、サラダを作ることもできます。そして何よりも笑顔が戻ってきました。

彼女はまだ11歳で成長期のため、今後再手術が必要になりますが、こうした境遇を生き抜いてきた子どもたちの強靭な精神力にはただただ感服します。

この2年半の間に、リハビリを終了した人も含めて900人以上がリハビリ支援を受けました。

リハビリの一環で遊園地へ遠足。笑顔を見せてくれた

保護者向けの栄養講習会には、母親だけでなく多くの父親も参加

小児科医のモハンマド・サイード医師（左）

深刻な栄養状況

経済・生活状況の悪化により、栄養障害を抱える子どもが増えています。そのため小児栄養の専門医による診察、家族への栄養改善指導、医薬品の提供を2015年より継続しています。今年の前半はガザ市のクリニックで162名、ハンユニス市のクリニックで147名、合計309名の乳幼児が支援を受け、そのうち305名で体重や身長、ヘモグロビン値が増加して、130人が治療を完了しました。また保護者を対象に栄養意識の向上ワークショップを実施しています。栄養障害やくる病、貧血の説明、栄養価の高い食材、食べ合わせの紹介などを分かりやすく専門医が説明しています。

栄養障害が起こる様々な要因

小児科医のモハンマド・サイード医師（写真上）に話を聞きました。

「2013年のデータでも、ガザの乳幼児には身長不足11%、体重不足5.5%、ビタミンD欠乏64%、ビタミンA欠乏73%、鉄欠乏32%、亜鉛欠乏71%、貧血31%などがみられました。身長不足の割合はアフリカ並みであり、一般に体重過多の傾向があるアラブ世界での体重不足の割合も深刻です。

ガザでは2009年から14年までの間に3回の大きな軍事侵攻があり、また厳しい封鎖による物資不足もあって、かつて見られなかったほど深刻な栄養障害の子どもが多く見られます。また体重は標準でも、ひどい貧血の子どもがいます。貧困が蔓延し、援助に頼らざるを得ない家族が増えていること、たんぱく質や鉄分、ビタミンなどの不足が深刻なのです。本来は食生活の改善で栄養改善が図れるとよいのですが、生活が厳しい家族が多いので、栄養剤などを提供することで、低栄養状態からの早い回復を図っています。

また、失業、貧困、心理的な圧迫や展望のなさから、食生活がないがしろにされがちです。そして早婚、知識や経験不足、核家族の増加などで子育て技術が伝わらず、特に年若い親の子どもに問題がみられるので、保護者向けの講習会も大変好評です。支援してくださる日本の皆さんに心から感謝しています。」

乳がんの薬品が足りない

封鎖による物資不足は、乳がん治療の場合もその例外ではなく、医薬品が圧倒的に不足しています。特にホルモン治療に必要なエストロゲン抑制剤がガザ内の病院施設、政府機関、民間の薬局すべてに不足している状態が3か月以上続いています。エストロゲン抑制剤は、がんの転移を防ぐために必須の薬剤です。手術などの治療の後、最低でも5年から10年の間は毎日摂取しなければなりません。在庫が不足しているため、毎日20件の新規問い合わせが来るようになりました。ガザ内では調達がほぼ不可能になっていて、私たちも対応に追われています。

最近、PLOとハマスの和解が話題になっていますが、うまくいって、市民生活が改善されることを願っています。

今年度は乳がんに関わる団体や行政関係者などに声をかけ、政策提言や連携を進めています。WHOと国連人口基金のほか、保健省、国際赤十字赤新月社、国連移住機関、地元と欧米のNGO、ガザ内の病院や大学などが参加

大学の前に、がん検診車をとめて、若い世代に理解を促す